

# しば た じょう 柴 田 城

柴田城は、<sup>あまやま</sup>天山地区字日焼にあります。城跡は標高338.9mの宮地嶽南麓の宝満川に面した、標高51mの独立丘陵上を占め、周囲の水田よりおよそ10m高くなっています。その場所は、天山集落の北に当り、江戸時代には城跡の南に博多街道が通り、西には宝満川に沿って幸府道が走っています。もともと筑後・豊後方面から筑前博多へ抜けるルートはもとより、米ノ山峠を越え筑前から豊前方面へ至るルートの分岐点という交通の要所に位置していることが分ります。この柴田城は、戦国末期に肥前勝尾城(鳥栖市)<sup>ちくしひろかど</sup>を本城とし、筑前・筑後まで勢力を振った筑紫広門の持ち城で、『筑紫良泰筑紫家覚書』『筑前国続風土記』『古戦古城之図』『家系併伝記』などに、その様子が記載されています。

まず『筑紫良泰筑紫家覚書』では、「……紹運・道雪二広門様御取掛被成、……宝満近所在郷二城々を被成取付、柴田城筑紫大和・木村備前、長岡城宗治部大夫、武蔵城馬廻侍六組被置候、組頭ハ帆足善右衛門其外五人被召置候、佐野城上野伊賀、牛頸城旗崎兵庫、白水城筑紫良甫在番被仕候」とあります。この記事からうかがわれることは、筑紫広門が、大友方の岩屋城主<sup>たかはしじょうらん</sup>高橋紹運、立花城主立花道雪<sup>たちばなどうせつ</sup>に対し、軍事行動を起こすにあたって、宝満城の近所在郷にその拠点となる柴田城、長岡城、武蔵城、佐野城、牛頸城、白水城などの城々を固めたことを指しています。また、これは天正<sup>てんしやう</sup>6年(1578)日向耳川の合戦において、薩摩島津氏に大敗した大友方に対し、筑紫氏が攻勢を強めたことを物語るもので、この時期以降、広門は古処山<sup>こじよさん</sup>城主秋月種実<sup>あきづきたねざね</sup>とともに、しばしば太宰府方面へ出兵したことが知られています。

『筑前国続風土記』では「天山村にあり、筑紫



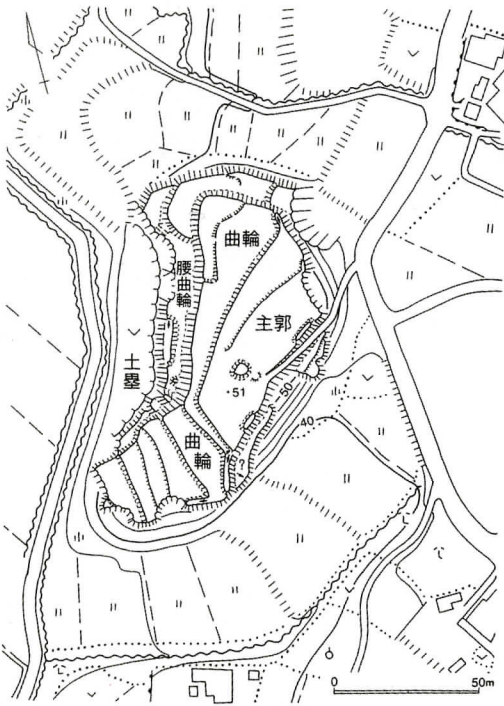
柴田城の図

(1843年、大倉種周測量。国立公文書館蔵)

氏の端城にして、村山近江、其子弾正在城せり、是筑紫広門の旗下也。……」とあり、あわせて天正6年秋の柴田川の合戦の状況が記されています。『古戦古城之図』では「筑紫氏の端城にして村山近江守其子弾正在城せり」とあります。

城跡は現在、畑・雑木林、墓地となっています。畑はほとんどが荒れており、城の痕跡をすぐには確認するのが困難な状態ですが、注意すれば曲輪<sup>くるわ</sup>(防備のための平地)を中心に、周囲に堀や土塁を見出すことができます。

柴田城の遠景(手前の世)。うしろは宮地岳。



柴田城図(岡寺良氏作成)

城の規模は南北130m、東西約60m。城の構造は南北60m、東西25mの主郭を中心に、西と南へ階段状に平場を連ねる構造で、周囲には北側から西側にかけて、帯状に半周する腰曲輪が巡らされています。このうち西側の腰曲輪には、一部土塁を巡らせ横堀状となし、防備を堅くしています。つまり、城の西側にもっとも防備の重点が置かれていることが分ります。

西方の敵方高橋氏の領分を意識した城構えと考えられます。

『古戦古城之図』は秋月藩士大蔵種周おおくらたねちかが、天保年間(1830~43)戦国期秋月氏の持城を中心に北部九州の古城を実地に踏査し、当時の測量技術をもって描いた絵図ですが、現在確認できる城の状態とほぼ一致しており、絵図の正確さをうかがうことができます。

なお、この絵図には西側の腰曲輪と宝満川の間に「城内」という記載があり、城の領域はさらに広く、柴田城は宝満川を外堀とする備えであったと考えられます。

『家系併伝記』は江戸時代に柳川立花藩に仕えた筑紫家に伝わる記録で、このなかに筑紫広門による宝満城攻めの様子が記されています。それによれば、「千手六之丞ト云家臣ニ侍足輕三百人相添、九月十二日ノ夜宝満へ忍ヒ入レ上宮ヨリ焼立ルト」「島田武蔵コノ火ヲ合図ニワクドウ山ヨリ討出、共ニ攻入侍大将成ヘシ」「村山近江同ク柴田ノ城ヨリ馳付攻、侍大将トミュ」とあり、柴田城が高橋方に対する最前線の城であったことが分ります。

今、柴田城の跡に立てば、西・北に宝満川を介し岩屋城、さらに遥か宝満城が望まれ、交通の要衝を押さえた筑紫方の最前線の城であったことが、偲ばれます。(石橋新次)